

## 一杯のラーメン

隣町にラーメン屋を営んでいる「きんちゃん」という友人がいる。出会いは運送業界仲間からの紹介。協会青年部のクリーンアップ事業にも参加したいといて誰よりも真面目に道路上のごみを拾ってくれる奇妙なラーメン屋の社長兼店長である。

我が家の超偏食な愛孫も、きんちゃんラーメンは必ず平らげる。私が休みの日は「ばあば、きんちゃんラーメン食べに行こう」とおねだりされる。私、息子、嫁、娘、愛孫二人のなかなかの大人数で伺う。

様々なメニューがある中、上の孫は「いつものお願いします！」とお子様ラーメンをご所望。配膳など担当しているきんちゃんの奥様も丁寧に「いつもありがとうございます。はい、いつものお待たせしました」と5歳児に丁寧な接客をしてくださる。我々も各々食したいものを伝える。別々のメニューなのに提供時間はすべて同じに合わせ、かつ、サービスで全員に悶絶するくらい美味しい黄金味玉を毎回無言でサービスしてくれる。トッピングで頼むと1個200円。それを毎回つけてくれるのだ。愛孫の「いつもの」ラーメンは食べやすいように温度を低めに塩分も抑えての提供。傍らに小さいスナック菓子。そんな気遣いが有難い。

店主、きんちゃんはいつもニコニコ。「僕に作れないラーメンはありません！食べたいラーメンを是非仰ってください」と自分に宿題をかける。メニューにはないものの、二日酔いの時には「体に染入る優しいラーメン」、おせちに飽きたときには「七草ラーメン」、昔食べて美味しかったなあ、と語ったたら「カレークリームラーメン」を再現。娘が好きな「カルボナーラ風ラーメン」なども。

「お客様が美味しくないと思われるラーメンは提供しません」と、きんちゃんのプロ意識には毎回毎回頭が下がる。お客であるこちらは美味しいラーメンを家族で食した後、その分の対価をお支払いし帰るだけなのだが、きんちゃんは少し違う。「一年間たくさん食べに来てくれてありがとう、是非うちの麺で年を越してください」と店の看板メニューである「むぎちゅう6食」（5510円）を毎年毎年送ってくれるのだ。それは私だけでなく常連客皆さんにだという。そのきんちゃんの想いが嬉しくて、暖かくて、私の家族は、隣町だというのにまた通ってしまうし、友人知人にも紹介してしまう。私の友人知人と知ると、また黄金の味玉サービス。これにまた感激してきんちゃんファンが増える。ハッピーループは続いていくのだ。

1月17日（土）にロータアクトウィンター交流会で職業奉仕についてセミナーがあった。グループワーク時にきんちゃんの話をしたら、早速アクトのひとりがきんちゃんのところに行ってくれたようで、アクトから写真が送られてきた。

「工藤亜紀子」の名前を知らせたので、もちろん黄金の味玉入り。

食す側、提供する側の双方から同時に、「ありがとう」と連絡が入り、言葉にはできないほんのりした幸福感を味わうことができた。